

東京YMCA



2020年

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

東京YMCA創立140周年／キャンプ100年 特集

YMCAの力と可能性

＜寄稿＞

山田 公平 さん

1949年生まれ。慶応大学法学部卒業。
米国力ンサス大学で国際政治を学んだ後、メリーランド大学社会福祉学科修士課程修了。
米国ボルチモアYMCAで老人福祉担当。
1979年～東京YMCA勤務。
1984年～とちぎYMCA勤務。特別養護老人ホーム「マイホームきよはら」を設立
1996年～東京YMCA帰任
2004年～日本YMCA同盟総主事
2009年～2015年 アジア太平洋YMCA同盟総主事



環境問題をはじめ地球規模の課題が山積する社会の中で、YMCAに期待されることは何か――。アジア・太平洋YMCA同盟元総主事の山田公平さんに寄稿いただきました。

2030年

「持続可能な開発目標（SDGs）」を見据え

150周年に向かつて

世界の課題に目を向けて

国連が定める「持続可能な開発目標（SDGs）」が世界中で注目を集めている。2030年までに達成を目指す目標を17分野で挙げているもので、例えば、貧困をなくそうという目標がある。貧しい国の状況だけを言うのではない。日本でも対応が必要とされている。日本の子どもの7人に1人が相対的に貧困という現状であり、子どもたちの実情と未来にどんな困難があるのか、みんな考えて行動を起こそうというものである。ほかに、食べ残が多いこと、感染症問題、再生可能なエネルギー開発、それと関連する森林の保護、海洋ごみの問題など。これらの課題は他人任せ、行政任せでは達成できない。一人一人の関わりが問われているのである。

これらの目標への一歩

は、まずは一人一人が意識して取り組む姿勢を生み出すことから始まる。特に民間団体、学校、地域の自主的な取り組みと企業の支援という両方が大切になってくる。地球に住む私たちの責任という意識を盛り上げることで、そしてその気持ちを具体的な行動に移していくための教育、動機付けが必要である。それは、YMCA本来の使命とも重なるものである。

世界のYMCAの集まりに参加すると、ヨーロッパの若者が、地球の気候変動、温暖化の問題に真剣に立ち向かっている姿を目にする。日本でもYMCAのもつ教育力をもっと生かし、一人一人が身近な地域の問題に気づいて、さらには地球規模の課題に向かつて行動を興すことが期待される。

若者の心を拓く経験を

世界のYMCAにはいくつユニークな取り組みがある。韓国YMCAの行う「ラオナティ」（意味は、アジアの友）と呼ばれる事業がある。

この事業は、派遣する側の企業とYMCAの努力だけではなく、受け入れる海外のYMCAが、時間と愛情を注ぐことで可能となる。共通の課題意識と目標をもつ世界とつながっているという、YMCAならではの特別な体験がYMCAの命である。

もう一つの財産にキャンプがある。今年は日本でYMCAキャンプが始まって100周年となる。YMCAのキャンプでは、グループ生活を通して新しい体験、新しい気づきを与えられ、人との関係の在り方を学ぶことに重点がおかれている。リーダーと呼ばれる学生ボランティアが、どんなキャンプをしたいか、時間をかけてプログラムを考える。そこでは楽しさをどう作るか、グループでの生活で大切なことは何か、何が子どもの成長につながる発見や体験になるかなど、一つのキャンプを実施するために何回もの打ち合わせを行う。キャンプに入るリーダーたちは、常にグループの子どもたちと向き合い、未知の体験をする彼らを励まし、その笑顔を自分のこととして喜ぶ。キャンプの終わりにリーダーと子どもたちが涙して別れる姿を見ることもある。子どもにとってもリーダーにとってもこの体験こそが、人としての成長につながる。これがキャンプの持つ教育力だと思う。

非日常の中での出会い、自分がやったことが人に喜ばれるような小さな体験。人と関わり、人に喜ばれることが自分の喜びになることに気づく体験がYMCAの命である。

キャンプが持つ教育力

赤△三角

私が東京YMCA山中湖センターで仕事を始めて40年近く経ちました。身内や友人からは3日持たないだろうと言われながら、気が付けば還暦を迎える年になりました。YMCAと出会ってなければ今頃どんな人生を送っていたのか……この人生がベストであったことは間違いないと思います。湖畔の中でもひとときわ自然豊かなこの施設で、乳幼児から高齢者、障がいのある方など多様な利用者と出会い、成長させていただきました▼

（2面に続く）

山中湖センター所長 天野訓宏

熊本豪雨災害から3カ月 球磨村の避難所に職員派遣



球磨村は今なお道路や橋が復旧せず自宅に戻れない方も多い。



避難所での健康体操

7月3日から降り続いた記録的豪雨から3か月が経ちましたが、熊本県内では今も道路や橋などインフラの復旧が進まず、復興半ばの状況が続いています。

熊本YMCAは特に被害の大きかった球磨村からの個人ボランティアは入れない状況ですが、

24日よりピースボート災害支援センターと協働で避難所の運営を受託しており、全国のYMCAはスタッフを派遣してこれをサポートしています。

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、県外からの個人ボランティアは入れない状況ですが、

YMCAは熊本地震の際の避難所運営が評価されていたこともあり、今回のスタッフを派遣しています。

現地で活動中の東京YMCA職員に、被災地の近況を聞きました。

共にいることの 大切さを実感

9月28日、10月12日派遣
南センター
池田 麻梨子

球磨村は、急流・球磨川沿いに広がる山あいの村で、豪雨の際には全約1400世帯の3分の1が浸水。道路も限られているため数日間孤立するなど深刻な被害を受けました。被害は広範囲にわたる上、新型コロナで人手が制限されて復旧が進まず、今も生活基盤を失

つたままです。

避難所は、車で1時間ほど離れた廃校・旧多良木高校内に設置されており、9月30日現在76世帯136人が滞在。YMCAは施設の整備や衛生管理、食事の配膳、救援物資の仕分け、子どもの遊び、健康のための運動指導など、避難所の運営全般を担っています。

避難所の皆さんはとも協力的で自立して生活されていますが、ドアの開閉など生活音の一つ一つに気遣うなど、ストレスが多いのも事実です。

10月末にはすべての仮設住宅が入居可能となりますが、一方ですでに仮設住宅へ転居した方の中には「避難所はにぎやかで楽しかったが、仮設は寂しい」と言っている方もいます。

つてくる方もいます。

少しでも気分転換になればと10月2日、ミュージアムのナオト・インティライミさんにオンラインコンサートをお願いしました。ナオトさんは30分の予定を60分に延長し、住民とトークをするなど心通じ合う時間を過ごすごことができました。

私は食事係として、毎食2時間ほどかけて消毒・配食・掃除などをしていきます。炊き出しも時折入りますが、お弁当が基本となります。最初は被災された方々と何を話して良いのか、何を話さない方が良いのか手探り状態でした。先日は「家が壊れたことが一番つらい」という声を聴き、家財一切を失うことの重みを改めて痛感しました。真の

子どもたちに
安心できる時間を

9月14日、10月13日派遣
西東京センター
郷 進太郎

私は9月14日から派遣され、避難所の施設整備や清掃、食事などさまざまなお手伝いをしていま



キッズルームで小学生の宿題をみる郷さん

復興に向けて被災者と向き合うことは容易なことではありませんが、YMCAができるのは、復興の過程に共に「いる」とかなと思います。そこにおいて、一人ひとりの声を聞き、寄り添うことができれば幸いです。必要とされる支援は多岐に渡りますが、知恵と力を結集し、YMCAらしい活動を展開していきたいと思っています。

はここでトランプをしたり、ダンボールで工作したりと、工夫しながら遊んでいます。

自宅に戻れないという状況は、子どもたちにとっても大きなストレスです。寂しさのためか甘えてきたり、ふさぎこんだりとなかなか思い通りに過ごしていません。避難所内では自由にテレビを見たり大声を出せる場所がないため、子どもたちが

引き続き熊本豪雨災害のため募金を受付ています。ご協力をお願いします。

【振込先】 みずほ銀行 神田支店 普通 112369
公益財団法人東京YMCA
*お名前の前に「クマモト」とお書きください。

【お問合せ】 東京YMCA総務部 TEL 03-6302-1960

支援の近況などは、随時ホームページでお知らせします。

<http://tokyo.ymca.or.jp/>

1面より

ないかと考える。

1995年の阪神・淡路大震災やその後の大きな災害の度に行われた被災者への支援活動は、今やYMCAの特徴になっている。ここでは、全国から集まって来るボランティアの安全を守りつつ、その人たちに手際よく仕事を手配し、日々変化する被災者たちのニーズに対応し、状況の変化を見極めて次のステップを実行する。そこで發揮されるYMCAスタッフの対応能力は定評があるが、これはキャンプを運営する中で培われる問題対応能力によるものだ

北米YMCA の事例から

も言われている。

アメリカ北部のYMCAの中に、キャンプ活動を中心に行っているYMCAがある。幼児期から小学生にはデイキャンプ（日帰り）から3泊、1週間というキャンプを子どもたちの発達に応じて組み、中学レベルになると2週間程度の長期キャンプが用意されている。さらに、高校以上になると1か月の国際体験が提供される。高校生15人が一組となり、世界10数か国のYMCAと連携して異

文化体験キャンプが行われる。アメリカ人高校生が、文化、言葉、習慣、食べ物など全く違う国で様々な体験をし、毎晩就寝前にその日に気づいたことを分かち合う。このような体験もまた、YMCAのネットワークの中で可能となる教育である。ここにもYMCAの命（大切なこと）があるように思う。人を真の成長に導き、他者のことや地域社会、そして世界へ目を開いていく体験人と関わり、人に働きかける中で自分の心の中に湧き出る喜びに気づく体験がYMCAの命ではないかと考える。そんな経験をひとつと多く、深く体

東京YMCA への期待

験する場を生みだしてもらいたいと思う。

少子化、高齢化が急速に進む日本。一方で、国際化とデジタル化の急展開も想像を超えるスピードで進行している。変化が速い中で、今本当に必要な備えは、一人一人の意識の転換であろう。SDGsに見られるように、世界の課題は、身近の課題でもあり、一人一人が考えて行動することが求められている。社会の課題について関心を持ち、調べ、話し合い、行

動を起こす。そんな人を育てる学びの場、教育の仕組み、人への投資が必要になっている。国際的なネットワークを持つYMCAには、これからの社会で求められる人材作りを意識して取り組んでいく使命がある。

これまでの歴史の中で、キャンプ、様々なスポーツ、モデル国連などを生み出して来たYMCAの精神は、時代の変化に応じて新しい活動を生み出していくパイオニア精神でもあった。150周年となる2030年に向けて、あらためて大きなビジョンを描き、人を育て、力強く歩み続けてほしい。



東京YMCA総主事

菅谷 淳

総主事カフェにようこそ。新型コロナウイルスによる最初の肺炎患者が確認されたのが昨年の12月8日。あれから間もなく1年になろうとしています。人類は英知を結集してワクチンや治療薬の開発に取り組み、マスクと消毒、ソーシャルディスタンスを守って感染拡大を食い止めようと頑張っています。いまだ収束のめどは立っていません。コロナ禍の中で私たちは、今までとやり方を変えた

り、工夫を加えたり、代わりになるものを見つたりしてYMCA活動に邁進しています。その過程で改めて気づかされたのは、ひとつのYMCA運動、活動の目的は何かということ。その目的を達成できず、やり方や方法を変えても問題ないことが分かっています。他にも講習会、研修会、各種会議、グループ活動、同窓会などの集まりもzoomなどを用いたオンラインで行われて

り、工夫を加えたり、代わりになるものを見つたりしてYMCA活動に邁進しています。その過程で改めて気づかされたのは、ひとつのYMCA運動、活動の目的は何かということ。その目的を達成できず、やり方や方法を変えても問題ないことが分かっています。他にも講習会、研修会、各種会議、グループ活動、同窓会などの集まりもzoomなどを用いたオンラインで行われて

います。実際に集まるリアリティーはありませんが、気軽に会えること、交通費がかからないことなどのメリットもあります。先日行われた「にほんご学院」の同窓会には5カ国の卒業生が一堂に会し、圧巻でした。

新約聖書『コリントの信徒への手紙』10章13節には次のようにあります。「神様はあなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるように、逃れる道をも備えてくださいます」。コロナ禍は間違いなく私たちに与えて試練です。しかし神様の

はこの試練に耐えられるように「逃れる道」も与えて下さっています。「逃れる道」とは何でしょう。これはコロナ禍から逃げるということではなく、今までと違った道を進むということではないでしょうか。

コロナに合わせて私たちを変えていくこと。コロナ以前は仲が悪かったけれど、この試練を一緒に乗り越えるために今まで以上に話し合い助け合うこと。正義と平和な世界の実現という明確な目的に向かう道、それが逃れる道であり真理に続く道である、そう神様は聖書を通して言われています。

